岡山県立短期大学紀要　37巻　34～38頁（1992）

子規と虚子

――「短詩滅亡論」を中心に――

柴田奈美

はじめに

子規の俳句革新において、「進化論」の受容は大きな意味を持つものであった。子規の進化論的思惟を、子規の後継者となった虚子が、どのように継承していったのかということを考察したい。

子規の進化論的思惟の内容は、数点にわたるが、[注(1)] 本論では進化論を「短詩の滅亡」ととらえた点について考察する。

まず、子規の考え方を明らかにし、その次に虚子が子規の考え方をどのように継承していったのかを考察したい。

子規「進化論」の受容のあり方については、松井利彦氏『正岡子規の研究上』（明治書院　昭和51年5月25日）を引用文献とした。

(一)　子規の「短詩滅亡論」

松井利彦氏が挙げる「子規自身が何らかの形で影響を受けたと思われる進化論に関係のある書物」の中に、『新体詩抄』と『小説神髄』がある。

『新体詩抄』は、外山丶山、井上巽軒、矢田部尚今が明治十五年九月に刊行した。その序中では、次のように述べている。

「古之和歌。不足取也。何不作新体之詩呼。」「将以作新体詩。而未知其成与否也。」（巽軒　井上哲次郎）「我邦にも長歌だの、三十一文字だの、川柳だの、支那流の詩だのと様々鳴方あり」「矢鱈に鳴りちらすとも十分に鳴り尽すこと能はず」「蓋し其鳴方の漸く簡単なるを以て見れば、其内にある思想とても又極めて簡単なるものたるは疑なし」「少しく連続したる思想内にいりて鳴らんとするときは、固よりかく簡単な鳴方にて満足するものにあらず」（丶山　外山正一）

ここには、直接俳句の名は挙げられてはいないが、和歌、川柳、唐詩と、それまでの我国における短詩に対して与えられた批判であり、簡単な詩であるから複雑な思想を盛りえないとする結論には、当然俳句も含まれていると考えられる。従前の詩を否定し、新しい詩の創生を予想している。

次に、『小説神髄』（明18）では、坪内逍遥が次のように述べている。

「文化発達して人智幾階か進むにいたれば、人情もまた変遷していくらか複雑とならざるべからず。いにしへの人は質樸にて、其情合も単純なるから、僅かに三十一文字もて其胸懐を吐たりしかど、けふ此頃の人情をばわづかに数十の言語をもて述尽すべうもあらざるなり」「進化を経て、小説おのづから世にあらはれ、またおのづから重んぜらる。是しかしながら優勝劣敗、自然淘汰の然らしむる所、まことに抗しがたき勢といふべし。マコーレイ氏かつて美術を論じて、世の開明の進にしたがひ美術の次第に衰ふるは天の数なりといはれたりき。げに道理なる議論なれども、こは上世より成立たる美術の上にのみいふべきことにて、十九世紀のこのごろよりやや美術壇なりたちたる小説の上にはいふべうもあらず」。

ここでも、今日の複雑な人情を三十一文字の短詩で表すことは、不可能であるとしている。『新体詩抄』の主張と異なる点は、マコーレーの詩歌進化論に触れて、詩の衰亡と小説の隆盛を主張している点である。

子規は、このような書物の影響を受けて、明治二十二年には次のように短詩が衰亡する点について述べている。

「詩歌なる者は実に文学文章よりも早く世に現れしことは疑ひなかるべし」「蓋し詩歌は感情に基きて起る者なるに、其感情たる者は動物にあつて最始に発達する者なれば、従つて詩歌の起るのも亦早かるべき理なり」「我国にても神代より以後歌よむ者は多かりしかど、文章の文学として現れしは紀元千六百年代の末にて、竹取、源氏物語の出でし頃を始とすべきなり」「太古の詩歌は

文句も平易に感情も単純に且つ其材料も己の境涯より得来たりし者」であるが、「世の進むにつれ勢力も発達し感情も高尚となるに及んでは目前のありふれたる事を感ずるに止らず、目の前になき事」「を思ひ出し」「猶一層発達すれば能く無形の事をも察知するに至る」「従つて詩歌の領分も広くなり、材料も面白くなり、終には長篇大作巻を重ぬるに至れり」（「詩歌の起源及び変遷」真砂集　明22・4）。さらに、これを俳句と結びつけて、

「惜しむらくは発句も亦十数字を以て限りとなす者なれば、其如何に変化し得らるべきとするも、錯列法（パーミュテーション）の定式に由つて対数表を繰り開けば、此言語を以て作り得べき俳句の全数は何首の上に出でずと明言するは最容易の事なり。此限ある十七字の小天地間には吾人の無数の感情を写し尽くすだにいと難きに、まして吾人の感情思想は発達するに従ひて益々こみいることは屢々説きし如くなれば、到底俳句を以て完全なる詩歌となすに足らざるなり。こゝに至りて考ふれば我国の歌は古より変遷なしと謂ふて可なり。若し之れ有りと謂はゞ悪き方に変りたるなり。既往は何ぞ論ぜん、将来に於ける和歌の運命如何ぞや。かの長唄は可ならざるにはあらねども、これより外に体なしと思ふは誤にて、調子だに合へば如何なる体を作り出すも勝手なり。又実際は上手にさへ作れば其詩歌の体が善き様に思はるゝ者なり。今日の日の本に一新体詩を作り出すの詩人は、一人も居らざるか。彼の所謂新体詩家の如きは詩歌の改良者にあらざるなり。角を直さんとして牛を殺す者なり」（同前）

と説き、新しい詩体、発達した思想感情に適応した詩体を考えていることと、現在の新体詩家の詩篇に対して批判的でいることを明らかにしている。

明治二十五年になると、組織的な俳論「獺祭書屋俳話」（十三）（日本明25・7・25日）の中で、次のように述べている。

「数学を修めたる今日の学者は云ふ。日本の和歌俳句の如きは一首の字音僅かに二三十に過ぎざれば之を錯列法（パーミュテーション）に由て算するも其数に限りあるを知るべきなり」「和歌」「俳句は早晩限りに達して最早此上に一首の新しきものだに得べからざるに至るべしと。世の数理を解せぬ人はいと之をいぶかしき説に思ひ」「和歌といひ俳句といふも無数にして尽くることなかるべし。古より今に至るまで幾千万の和歌俳句ありとも皆其趣を異にするを見ても知り得べき筈云ふなり。然れども後説は道理に疎き老爺のまよひ言にして」「取るに足らず。其実和歌も俳句も其死期に近づきつつある者なり」

として、数理の上から、可能性の薄さについて述べている。さらに、その滅びる時期については、

「其窮り尽くすの時は固より之を知るべからずといへども概言すれば俳句は已に尽きたりと思ふなり。よし未だ尽きずとも明治年間に尽きんこと期して待つべきなり。和歌は」「区域も俳句に比して更に狭隘」「故に明治以前に於いて略ぼ尽きたりと」「思惟する」としている。こうした発言が「獺祭書屋俳話」の中でなされていることについて、松井利彦氏は「子規が俳句革新にあたって、詩歌衰亡という進化論的思惟を持っていたということと同時に詩歌進化論から、複雑な思想感情が盛りえぬからという立場をとらず、数理のみを取ったということで、一つには、進化論説の立場をとる限り、改革の余地は既に消滅するのに対し、数理によれば、兎に角、明治年間だけでも余地があると断言できるという、実践家としての安心感があったと思われる」（『正岡子規の研究上』P437）と考察されている。この時期虚子宛書簡の中でも、「歌発句共に永久のものに非ず、殊に発句は明治に尽くべきものと小生の予言なり」（明治二十四年十二月二日付）と述べており、短詩滅亡論の虚子への直接的な影響のあったことがわかる。子規は、この短詩の滅亡という進化論的思惟を持ち、短詩の命脈を見届けようとする一方で、次のように新しい詩体の創造を考えていた。

「余は更に和歌俳句の外に一種の新詩歌を創造することを熱望するものなり」「世の所謂新体詩は世上に所謂新体詩なる者の如き尋常小学校の程度にある文学を意味するに非ざるなり」（「獺祭書屋俳話」（十五）日本　明25・8・3日）。

さらに、この考え方は明治三十年になると、

「今新体詩に韻を踏まんとせば多少俳句の構造を学ばざるべからず。又俳句の構造を学ばんには新体詩に韻の踏まぬことはあるまじと思はる」（「新体詩押韻の事」日本　明30・3・5日）と述べ、俳句的押韻新体詩の創造という考え方に展開する。

子規の俳句の滅亡についての考え方は、その後も変わらず、明治三十二年には次のように述べている。

「歌又は俳句の総数即ち錯列法は対数表によりてたやすく算出するを得べし」（「樽の雫」ホトトギス明33・8・10）。

そして、一方では、

「俳句今全く尽きたるとするも吾人は之を悲しまず。又それがために今迄俳句を学びたることを悔いず、又一句なりとも俳句残りあらんには之を学ぶ人あることを喜ぶなり」（「明治二十九年の俳句界」（十五）日本　明30・2・11）

と述べ、俳句革新のための研究に意欲を燃やしていることがわかる。

以上、子規の短詩の滅亡についての考えをまとめると、次の三点になろう。

① 短詩は、明治年間に滅亡すること。

② 短詩滅亡の根拠として、複雑な思想感情が盛り得ぬからという詩歌進化論を途中で捨て、錯列法という数理のみを考えたこと。

③ 俳句を研究しつつ、それを土台とした新詩を求めていくこと。

(二) 虚子と「短詩滅亡論」

子規の短詩の滅亡についての考えをまとめた右の三点について、虚子はどのように考えていったのであろうか。それぞれについて明らかにしていきたい。本稿では、右の「①短詩は、明治年間に滅亡する」と考えた点について明らかにしたい。注(2)

明治二十八年では、

「俳句の形すでに腐敗したれば何ぞ蝉脱して一新体を為さざる、未だ腐朽し去らずんば何ぞ一新天地を歌はざる」（「俳話」日本人　10月5日）

と二つの方向を示唆し、さらに

「過去の俳句として重きを為し未来の俳句として有望なるものは独り叙景詩としての俳句にあるかな」「叙景詩として俳句の未来亦多望ならずや」（「俳話」日本人　10月24日）

と述べ、叙景詩としての俳句を追求するならば、俳句という枠組みの中で、新しい境地を作ることは可能であるという考えを明らかにしている。

そして、明治二十九年には、「俳話」（日本人　1月20日）の中で、明治時代は元禄、天明期に続く三大時期の最後であり、完成期であることを述べ、

「諸君は二百余年間の命脈を保ち来たりしものゝ命脈を全くせんとする勇者に非ずや、之を二三年間に於いて成熟し得べしと考ふるが如きは軽率なる思慮といはざるべからず」

と俳句の伝統の重さを強調している。

この「伝統の重さ」を強調する点は、その後も変わることなく、

「俳諧は従来存在し来った日本文芸の一形体である。それはなか〳〵亡びるものではない」（「虚子俳話」玉藻　昭27・11）

「上部に出してしまってゐる勢力は翌日はもう衰退する。深く潜勢力を有するものには恒久性がある」（「立子へ」玉藻　昭29・7）

と主張している。

このような確信を述べる一方で、

「今日に在つても俳句は既に過去の文学だ、新しい短詩が生まれねばならぬといふ人がある。これも一応尤もの説だ。併し如何に変化するかはやつて見ねばわからぬ」（「俳諧一口噺」國民新聞　明39・9・14日）

と、実作をすすめていく決意を述べている。

この実作優先の考え方は、子規の「這般の事は理屈を並べて論ぜんより実際に就きて試験するが近道なり」（「俳諧反古籠」ほとゝぎす　明30・2・15）といった考え方に重なるもので、その後も変わることなく、次のように述べている。

「理屈はいはないで実行して見ること」（玉藻　昭17・7）。

「創作するものは理屈を云はぬことだ」（「俳話小話」ホトトギス　昭24・3）。

「理論の花よりも芸の花こそよけれ」（「立子へ」玉藻　昭29・9）。

「私は昔から理屈が実作に先き立つことは好まないのである。何事もさうであるが、特に俳句に就いてはさうである」（「虚子俳話」昭31・5・6）。

このような実作優先の姿勢が、虚子に短詩滅亡論によって俳句を捨て去る態度を採らせず、未だ余命ある俳句がどのように変化するか、研究の対象としてとらえていく態度を採らせるに至ったものと考える。

このように実作を優先させていった結果、俳句の滅亡については、次のような見解を述べている。

「写生句は元禄天明にないところのもの、明治大正にはじめてあるところのものを産みつゝある」（「写生の二字」ホトトギス　大11・2　福岡日日新聞より転載）。

「客観的事実に興味を持って句にすることは、近代が最も発達してゐる」（「写生俳句雑話」ホトトギス　大12・5）。

「大正今日の句になりますと、最も意識された客観句であります」「客観詩として意識して斯く縦横に句境を開拓したといふ事は大正今日の手柄としなければなりますまい」（「俳句小論（下）」ホトトギス　大15・12）。

さらに、昭和に入ると、次のように自信に満ちた主張が見られるに至る。

「今日の俳句は俳諧史上未だ嘗て進まなかつた境地に進み得た俳句である」（「漫談会」ホトトギス　昭4・7）。

「昔、子規の枕頭で俳句の命数といふ事が問題になつた事がある。早晩尽きるといふ事には誰の意見も一致した。十七字と限られた以上、パーミュテーション（順列）とか、コンビネーション（組合せ）とかいふもので計算しても、限りのあるものである事は疑ふ余地がない。十七字の天地にちぢかまつてゐるよりも新しい詩を選むべきである、といふ説もあつた」「私は亡ぶべき時が来たら亡ぶのもよからうではないか、と考へた。以来五・六十年、未だ亡びさうにもない」「子規は嘆息して、俳句は我等時代でもう飽満状態になるのではなからうか、と言つた。が、なかなかさうでもなささうだ」「この小さい潔い天地に留る事を欲しないものは去れ。この伝統芸術を愛好するものは留れ。俳句の亡びる時を気にする人は、また人類の亡びる時を気にする人であらう」（『虚子俳話』昭30・9・27）。

ところで、この自信を支える、虚子の俳句理念として、「柳緑花紅」が挙げられる。

大正十二年九月の、関東大震災を経験することにより、虚子は、俳句をゆとりを以て現実に接し、悟った心持ちを詠い、楽しむ文芸だと規定するようになる。

この後、大正十四年になると、

「俳句は詩のエッセンスで」「様々の主観の色彩を排除し尽くして最後にとゞまるものは所謂柳緑花紅であらねばならぬ」（「写生ということ」ホトトギス大14・9）

と説いている。

この「柳緑花紅」については、

「作者の所謂、柳緑花紅といふ文字の現はすところのものは」「俳句の境涯と甚だ似寄つたところのものと考へる」「何の説明はしない。唯柳は緑、花は紅、と感ずるところに、宇宙の本体を会得したと感ずるところがある」「何等の理屈をも言はず、説明をも加へず、唯柳は緑、花は紅と写すところに俳句本来の面目がある」（「街頭に出て法を説く」ホトトギス　昭4・4）

と説明。これは、あるがままに観ずる態度、悟りの境地につながり、「花鳥諷詠論」に重なっていくものである。「花鳥諷詠論」の中では、「愉快に」「軽く」「有趣味に」素材を扱い、「ゆとり」を持つ人生態度、即ち傍観性を一義とするものとして規定した。

このように、新興俳句とは別の、悟りにつながる人生的なものを、俳句に求め得ることを確信した結果、前に挙げた「今日の俳句は俳壇史上未だ嘗て進まなかつた境地に進み得た俳句である」（「漫談会」ホトトギス　昭4・7）といった主張になったものと考える。

おわりに

以上、述べてきたことをまとめると、次のようになろう。

虚子は、子規の「短詩は明治の間に滅亡する」という考えを一応承けて、その上で俳句の研究を進めた。その際、俳句という長い伝統を持つ芸術は簡単には滅びないという確信と、叙景詩としての俳句に見通しを持ち、理論よりも実作を優先させて、俳句の可能性を追求していった。

その結果、明治時代においては、明治が最も俳句の進歩した完成期と称し、大正時代においては、大正の俳句が最も進歩しているとし、昭和期に入ると、

ゆとりを持って現実に接する態度、悟りの境地につながる人生態度を句作の態度とすることにより、新興俳句とは違った方向で、人生的なものを俳句に求めることが可能であることを確信し、昭和の俳句は、未だ嘗て進まなかった境地に進み得た俳句と述べ、常に俳句は進歩し続けるという結論に至ったわけである。

（註）

(1) 既に、次の諸点については、明らかにしている。

①進化を「簡より繁へ」と捉えた点（「子規と虚子 ――『簡より繁へ』を中心に ――」解釈 平成3年8月）

②進化を「分化」と捉えた点（「子規と虚子 ――『「俳」の分化」を中心に」天狼 平成3年2月）

③進化を「適応」と捉えた点（「子規と虚子 ――『適応』を中心に ――」岡山大学国語研究 平成4年3月）

(2)「②短詩滅亡の根拠として、～錯列法という数理のみを考えたこと」については、既に「解釈」（平成4年4月）に「子規と虚子 ――簡単の肯定 ――」という題で発表している。

参考文献

松井利彦『正岡子規の研究』明治書院 昭和51年5月25日
松井利彦『近代俳論史』桜楓社 昭和40年8月25日
山口誓子・今井文男・松井利彦編『高浜虚子研究』右文書院 昭和49年3月30日
清崎敏郎『高浜虚子』桜楓社 昭和60年11月20日（新訂版4版）

平成四年三月三一日受付
平成四年五月 七日受理